

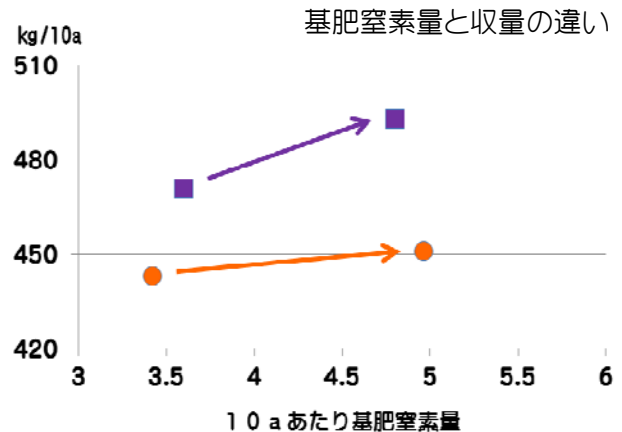
平成28年度 JA越前たけふ「重点指導対策」

越前しきぶ姫のブランド力を高めていくため、「重点指導対策」に取り組み、消費者から信頼される「高品質」で「良食味」な米づくりを実践しましょう。

1. 土づくり対策

- 地力増進を目的とした発酵ケイフン等の散布を実施し、低コスト土づくりや有機肥料栽培での基肥、生育期間中の追肥として活用しながら初期生育や莖数を確保することで、収量向上を目指します。化成肥料と違い、窒素の溶出が調整しにくく、倒伏に強い多収性品種（あきさかり、日本晴）での使用をお奨めします。また、収量や品質向上に向け、ケイ酸資材等の中間追肥散布指導を実施します。

有機肥料栽培における



問題点

- ・ HG 有機 666 などの有機肥料は比重が軽いため 10a あたり 60 kg 程度しか田植機で入らない
= 基肥窒素として 3.6 kg/10a しか供給できない、たくさん入れるとコストが高くなる

改善点

- ・ 基肥散布前に安価な発酵ケイフン 100 kg/10a を散布する
= 発酵ケイフンの窒素成分は平均 4% 程度のため窒素量 4.0 kg/10a で補給でき、有機肥料は幼穂形成期までに稲に約 6 割吸収されることから 2.4 kg/10a の効果が得られる

2. 売れる米づくり対策

- JA 越前たけふでは全国に先んじて水稻の特別栽培化を進めてきましたが、より安全・安心な省農薬（農薬 8 割減）栽培などを行い、越前しきぶ姫の更なるイメージアップを図ります。又、生産者の努力が十分に報われるよう、新たな買入制度を実施することで意欲ある生産者を継続的に支援し、これらの成果についてもコンテスト顕彰を実施します。

- JA 越前たけふでは米の卸売業者や外食産業への直接販売を行っており、それら実需者からは、寿司米や掛け米として、現在では希少品種となりつつある「日本晴」の引合い要望が多くあります。2年後の減反廃止を見越して、「日本晴」の生産販売を中長期的に強化する「日本晴復活プロジェクト」を継続実施し、激化する産地間競争の中での生き残りを目指します。



日本晴でも加工用米の対応が可能です

日本晴については、主食用の寿司好適米として作付拡大をお願いしていますが、ハナエチゼンやコシヒカリと同様に、加工用としても出荷ができます。

3. 獣害防止対策

■ 山間地を中心に拡大しているイノシシやサル、シカなどの獣害対策として、捕獲人員の配置や育成とあわせ、市町・地区・集落間のネットワークを構築し、電気柵の正しい張り方指導、捕獲檻の設置や巡回パトロールを行いながら「農作物被害ゼロ作戦」を実施します。本年度は各地区にモデル集落を設定し、集落が関係機関と力を合わせて被害を防止する体制強化を図ります。



電気柵適正設置マニュアル



1. 防御できない集落の現状

- 1) 間違った張り方をしている
- 2) 進入した後に対策を講じていない
- 3) 被害が徐々に拡大
- 4) 根負けして被害圃場を放任

2. モデル集落への対策 (うちの集落だけ手厚くというのではなく、一緒に被害を防ぐモデル)

1) 電気柵設置の初期段階から正しい張り方の指導

- ・ 集落(実地)説明会、出前講座
- ・ マニュアル手引きの作成

2) 集落全戸への情報発信カードの配布

- ・ 高齢者など在宅者からの情報収集
- ・ 関係機関間の情報共有

3) 定期的パトロールと捕獲檻設置

- ・ 捕獲檻の優先設置、電気柵効果の動画撮影
- ・ 対策班・JA・県による見回り

4) 被害があった後の対応指導

- ・ 集落への報告、二次被害防止策
- ・ 実証事例として紹介

情報発信カード



3. 集落にお願いしたいこと

- ・ 一部だけを守るのではなく、進入路、山際(全体)を守ることが大切
- ・ 水稻の品種を団地的に作付した方がイノシシの踏み倒し被害は確実に分散される
- ・ コシヒカリで一服せず、日本晴の収穫まで(10日~14日長く)管理を継続
- ・ 集落の担当者を決め、常に連絡が取れるように
- ・ 電気柵は既存のもので十分、モデル集落というのは補助金の支援でなく人的な支援
- ・ 電気柵設置による防御と檻による捕獲の合わせ技で被害が防げることを実証

～ 集落が関係機関と力を合わせ、数にまかせて被害を防止 ～